

ISSN 2186 – 3989

大学生の授業見学を小学校教員の外国語科研修に  
活かす試み

— 学生の振り返りと教員へのインタビュー —

階戸 陽太

The Attempt to Use University Students' Class Visit for Elementary  
School Teachers' on-the-job Training Through Students' Reflection and  
Interview with a Teachers

Yota Shinato

北 陸 大 学 紀 要  
第50号(2021年3月)抜刷

大学生の授業見学を小学校教員の外国語科研修に  
活かす試み  
—学生の振り返りと教員へのインタビュー—

階戸 陽太\*

The Attempt to Use University Students' Class Visit for Elementary School Teachers' on-the-job Training Through Students' Reflection and Interview with a Teacher

Yota Shinato\*

*Received January 13, 2021*

**Abstract**

The purpose of this paper is to show how student class observations can create on-the-job training opportunities for elementary school teachers through student reflection and interviews with the elementary school teacher.

With the 2020 revision, the new Course of Study includes a Foreign Language (English) subject as part of the elementary school curriculum. Because of this revision, the necessity to train teachers of foreign languages has increased. On the other hand, the goal of the Core curriculum of Foreign Language was to create a standardized teacher training course throughout the country that includes classroom visits.

The author has introduced class visits in the English teacher training course to create opportunities for students to experience real English classes in person. Moreover, these class visits offer a meaningful exchange between elementary school teachers' on-the-job training and university students interested in pursuing careers in education. To determine the viability of class visits, an interview with an elementary school teacher who allowed university students to observe his class was conducted. The analyses of the interview suggest that class visits provide valuable learning potential for the students as well as the school teachers.

**Key Words** : Training of teachers, Teacher training, Foreign Language at Elementary school

---

\*北陸大学国際コミュニケーション学部 Faculty of International Communication, Hokuriku University

## 1. はじめに

本稿は、教職を目指す大学生の授業見学を小学校教員の外国語科の研修に活かす試みについて、大学生の振り返りと小学校教員へのインタビューから分析し、小学校外国語科の研修について提案することを目的としている。

## 2. 教員研修・コアカリキュラム

新学習指導要領（2017年告示）が2020年から小学校で始まり、特に教科化された外国語では教員研修がこれまで以上に必要となっている。佐藤（2015）は、学校を専門家の学びの共同体としてとらえている。また、秋田（2012）は、校内研修の大切さを指摘し、教師の学びの中心となる場として位置付けている。一方、姫野（2017）は、問題点として、制度化された研修では、受講者が受け身になってしまうという点について指摘している。

学習指導要領の改訂に合わせて、「外国語（英語）コアカリキュラム」（文部科学省，2019）が作成された。小学校での外国語の教科化に伴い、大学の教職課程の質の均一化を目指す目的があり、この中で、英語科教育法の中に、授業観察を盛り込むことが挙げられている。

筆者は、これまでも担当する「英語科教育法」で授業見学を取り入れてきた。こうした授業見学を通して、学生には、実際の学校現場を体感できるようにし、また可能であれば、授業者の教員と意見交換する場を設定している。この実践から、授業見学を通して、授業者の教員にも学びがあるのではないか、と考えるようになった。さらに、こうした授業見学が、教員研修に活用できるのではないか、と考える。本稿では、1つの授業見学を取り上げて、授業見学を教員研修に活かす可能性について、考察する。

## 3. 授業見学

2018年後期開講の英語科教育法Ⅱで行った授業見学を取り上げる。

### 3.1 学生の背景

英語科教育法Ⅱは2年生が対象で、3名が受講していた。この授業では、研究発表会を含む4回の授業見学を設定した。10月に公立中学校研究発表会、11月に金沢大学附属小学校の研究発表会、金沢大学附属中学校の研究発表会、12月に公立小学校での授業見学を行った。

ここでは、12月に行った公立小学校の授業見学を取り上げる。

### 3.2 授業者の背景

授業見学を依頼したのは、石川県内のA小学校で、授業者は30代前半の教員歴7年目の男性教員だった。6年生の担任で、専門は社会科であった。外国語は専科教員が主に担当し、担任は隔週で授業を行っていた。

この教員は2019年4月に異動があった。異動先でも6年生の担任で、外国語は専科教員が担当していた。後述するインタビューは、異動先の小学校で行った。

### 3.3 授業見学の流れ

授業見学は、2018年12月7日に実施した。当日は授業見学の後、授業者と学生との意見交換の時間を設定した。

授業は6年生の外国語で、内容は『Hi, Friends!2』のLesson 6を扱っていた。授業は普段通りで、こちらから依頼したことはなかった。授業は、時間の表現を確認した後、各自の1日の予定について英語で話し合う活動を行った。授業後、学生が質問をする形で授業者との意見交換を行った。

後日、学生は授業見学の振り返りを作成した。授業者には、この振り返りをもとに、5ヶ月後、2019年5月にインタビューを行った。

## 4. 分析

分析の対象は、学生3名の振り返りと教員へのインタビューとした。全て、質的に分析を行った。

学生振り返りは、3名それぞれの言葉から、ラベリングを行った。その後、各ラベルを検討し、カテゴリーにまとめた。

教員へのインタビューは、書き起こした後、ラベリングづけ、カテゴリー化を行った。最後に、これら2つの関連づけを行った。

## 5. 結果と考察

### 5.1 学生の振り返り

学生は授業見学の後、自由に振り返りを行うことにしている。3名それぞれの分析結果を提示する。

学生Aでは、《金沢大学附属小学校との比較》、《疑問》というカテゴリーができた。具体的な言葉を以下に挙げる。

学生 A

《金沢大学附属小学校との比較》

「楽しさ」

・一番初めに金大附属小学校の授業見学に行ったら思ったことは、ほとんどの児童が先生の言っていることを理解してなおかつ児童は前もって授業に必要な課題などをしっかり調べてきてあって先生もすごくやりやすいのかなって思っていました。反対にA小学校は、みんな本当に元気があって私もそのクラスにいてほっこりできるし、みんな楽しんで授業していたのかなと思いました。

《疑問》

「生徒の理解」

・授業を楽しんでできるのはいいことかもしれないけれど、授業の内容をしっかりと理解しているかと思ったらそうではないのかなと思いました、なぜなら児童と会話をしたとき、今回の狙いに到達していない、理解していないのかなと感じたからです。

学生 B では、《金沢大学附属小学校との比較》、《教師への気づき》というカテゴリができた。具体的な言葉を以下に挙げる。

学生 B

《金沢大学附属小学校との比較》

「楽しさ」

・金大附属とはまた違った楽しそうな授業だった。

《教師への気づき》

「楽しむ」

・先生もとても笑顔で授業を楽しんでいるように見えた。

「生徒への理解」

・小学校の先生は、担任もしているから子供たちの特徴もわかるから楽しい授業をすることが出来るのかなと思った。

「ジェスチャー」

・分からない子も分かるように、eat breakfast だったら食べる真似をしていた。

学生 C では、《授業運営》、《教師への気づき》というカテゴリができた。具体的な言葉を以下に挙げる。

学生 C

《授業運営》

「話す時間の多さ」

・授業の中でのアクティビティにかかる時間が多くあり、児童が英語を話す時間が豊富に設けられているのがとても良いと思いました。

「インプット」

・“いろんな友達に一日のスケジュールを聞こう”という本時の目標のために、スクリーンでの数字の読み方の確認、早口で1～50の数字を読みタイムを競う活動、例文を使ったミニゲーム等を行い、児童に単語や文のインプットの時間を十分に与えていたのがすばらしかったです。

《教師への気づき》

「ジェスチャー」

・先生がジェスチャーを多く使っていた。

## 5.2 小学校教員へのインタビュー

授業を行った教員へのインタビューは、授業見学の後、5ヶ月後になった。筆者が、教員の異動先を訪問して行った。インタビューを行う前に、学生の振り返りを読む時間を設けた。その後、授業を思い出しながら、インタビューを進めた。形式は半構造化インタビューで行った。

インタビューを分析した結果、《学生の振り返りからの気づき》、《学生へのアドバイス》、《信念の確認》、《授業見学後変わったこと》、《問題点》、以上5つのカテゴリが形成された。以下に具体的な言葉を挙げながら、提示する。

《学生の振り返りからの気づき》

「客観的」

・あんまり自分の授業を振り返ることがないので。客観的に見てもらったデータの方が、自分にとってはありがたいです。

「ストレート」

・生意気やな、と思う反面、でも学生って、すごい見る視点って、現場を知らないからこそ、ストレートに言える。いい意味でなれ合いじゃなく。

「これからへのヒント」

・意図をもっているような活動をした方が。一つひとつの活動に、しっかり、だれかのマネをするんじゃないで、まあ、まねしてもいいんですけど、なんでこの活動をしているのか、なんでこの行動をしているのか、考えて授業をしていくのが大事やなど。この子らのを見て思いました。改めて。楽しかったで終わるじゃなくて、なんでその活動をゲームを通してやっているのか。ゲームを取り入れることによって、英語を苦手になっている子が変わるかもしれない。なおかつ、ただゲームをやるんじゃないで、英語を使ったゲームをやることによって、その単語に慣れさせるとか、そういった目的、ねらいをもって外国語活動、取り入れるべきだと思いました。

「客観的」な学生の振り返り、「ストレート」な意見から、外国語の授業への「これから

へのヒント」を得ていることがわかる。

《学生へのアドバイス》

「姿勢」

・教科書の内容を抑えるのは当たり前なんですけど、授業を通して、人との付き合い方とか、苦手なことに向き合う姿勢であったりとか、そういったところをまず優先して、教えられる先生になってほしいなと思いました。

授業後の意見交換、学生の振り返りから、教員としての「姿勢」について《学生へのアドバイス》を述べていた。

《信念の確認》

「コミュニケーション能力」

・教育全体を通して、培ってほしいコミュニケーション能力に感想を書いて下さっているのがありがたいです。英語以外についてもそうなんですけど、学習意欲の少ない子は学びは少ないと思っているので、どれだけ点数を取れていたとしても、そこかな、と。

「ジェスチャーの大切さ」

言葉だけじゃなくて、ジェスチャーであったり表情であったり、そういった部分で、それを利用して伝えることが大事やなど。この B さんが書いた、わからない子もわかるように eat breakfast で食べるマネをしていただとか、こういったところを大事にしていきたいなと思いました。

学生の振り返りから、この教員が意識してやってきた「コミュニケーション能力」、「ジェスチャーの大切さ」といった教員自身の《信念の確認》ができたことがわかる。

《授業見学後変わったこと》

「評価の大切さ」

・評価ですかね。もっと細かく見ようかと。後は、視覚的な準備をするようになったかな。絵カード。学力低い子らに焦点を当てるのが近道やな、と思ってるんですけど。視覚的に助けになるかな、と。絵カードを準備するようにしました。準備はすごい大変なんですけど、その手を抜かないようになりましたね。

授業後の学生との意見交換から、「評価の大切さ」を意識するようになったことを《授業見学後変わったこと》に挙げていた。

#### 《問題点》

##### 「英語の力量差」

・英語を習っている子と習っていないことの差、が小学校の英語教育の一番の課題やな、と思いますね。その力量の差は、国語や算数の比じゃないと僕は思っています。

##### 「専科教員の問題点」

・評価は、全員できてきかない。限界。できない。1.5時間の0.5時間しか見れていない時点で、隔週しか見れていない時点で、見れない。見るには難しいんですよ。

授業見学、学生との意見交換から子どもの「英語の力量差」、学級担任ではなく専科教員が入ることで評価が難しくなるという「専科の問題点」を《問題点》として挙げていた。

### 5.3 考察

授業見学、学生の振り返りを通して、授業者は《学生の振り返りからの気づき》、《学生へのアドバイス》、《信念の確認》、《授業見学後変わったこと》、《問題点》についてインタビューを通して述べていた。学生の振り返りを通して考察する。

《学生の振り返りからの気づき》では、「客観的」な学生の振り返り、「ストレート」な意見から、外国語の授業への「これからへのヒント」を得ていることがわかる。これらは、学生Aの「生徒の理解」についての《疑問》、学生B、学生Cの《教師への気づき》に関連していることがわかる。

《学生へのアドバイス》では、教員としての「姿勢」について述べていた。これは、学生A、学生Bの《金沢大学附属小学校との比較》、学生Bの《教師への気づき》に関連すると考えられる。

《信念の確認》では、この教員が意識してやってきた「コミュニケーション能力」、「ジェスチャーの大切さ」を確認していた。これは授業見学全体を通して出てきたものと言えよう。

《授業見学後変わったこと》では、「評価の大切さ」を意識するようになったことを挙げていた。《問題点》では、「英語の力量差」、学級担任ではなく専科教員が入ることで評価が難しくなるという「専科の問題点」を挙げていた。いずれも、授業見学を通して出てきものである。授業見学を通して、教員の授業への気づきがあったことを示唆している。

### 6. まとめ

図1は、大学生の授業見学を通して、大学生だけでなく、授業者の教員にも学びがあることをまとめたものである。教員は、授業見学と意見交換を通して、気づきを取り入れていた。また、学生の振り返りから、自分自身の信念の確認もできていた。このように、授業見学は大学生だけのものではなく、教員研修の可能性を示していると考えられる。

こうした授業見学の持ち方について、今後検討していくことが必要であると考える。よ

り効果的な教員研修としての授業見学について、実践を通して探って行きたい。

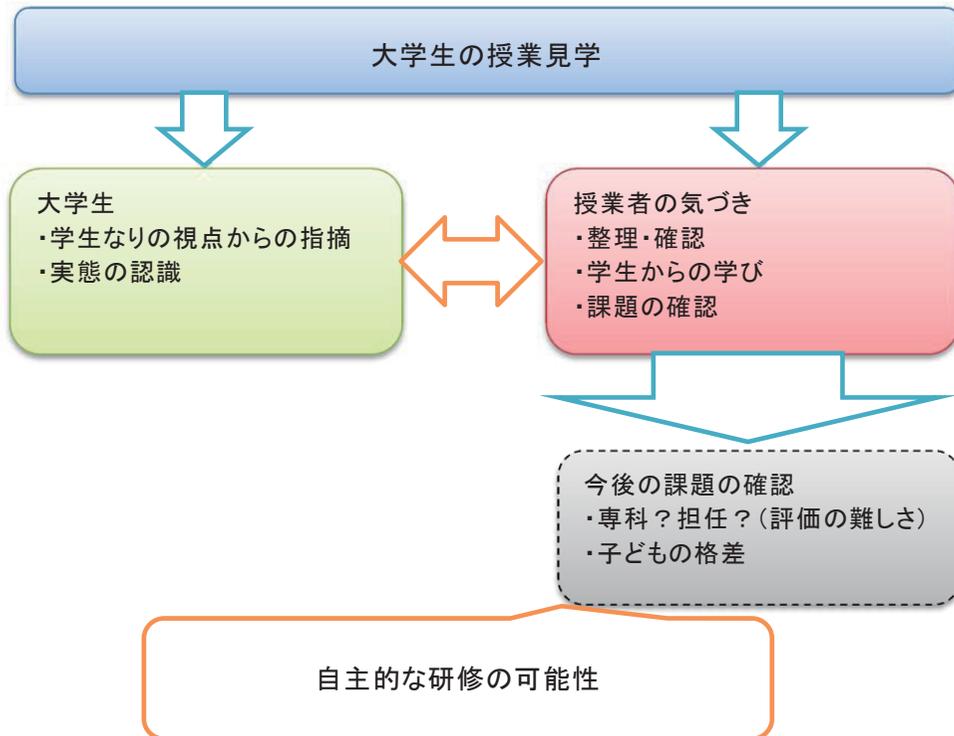


図 1 授業見学を活かした教員研修の可能性

#### 謝辞

授業見学を受け入れていただいた、A 小学校と授業者の先生に感謝いたします。

#### 引用文献

- 秋田喜代美 (2012) 『学びの心理学-授業をデザインする-』 (左右社)  
佐藤学 (2015) 『専門家として教師を育てる-教師教育改革のグランドデザイン』 (岩波書店)  
姫野完治 (2017) 「Lesson Study と教育工学の接点」『Lesson Study (レッスンスタディ)』 (小柳・柴田編著), 188-225, ミネルヴァ書房  
文部科学省 (2019) 「外国語 (英語) コアカリキュラムについて」  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/04/04/1415122\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/04/04/1415122_3.pdf)